

英語とフランス語の未来表現の比較*

和田 尚 明

1. はじめに

英語のいわゆる未来形として扱われる「will+ 不定詞」構文（以下、will- 文）の分析は、特に、「be going to+ 不定詞」構文との比較分析を中心に、莫大な数にのぼるし、単純現在形による未来時指示用法に関する分析も、特に、現在進行形の未来時指示用法との比較を中心に盛んに行われてきた。¹一方、フランス語の単純未来形ならびに単純現在形による未来時指示用法の分析を扱った文献も相当数にのぼる。²また、英仏語の未来形の使用範囲の違いを指摘した文法書や専門書も数多く存在する（Fleischman 1982, Judge & Healey 1983, Prince 1986³, Jones 1996）。³しかしながら、英仏語の未来形ならびに未来時指示用法の単純現在形を併せて、一般的な時制理論の観点から体系的に比較分析した先行研究は、筆者の知る限りあまりないように思える。本稿の目的は、この観点から、英仏語の両時制形式が示す時制現象を説明することにある。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では、説明すべき事実、特に、英語とフランス語で異なった振る舞いをする、未来時言及に関する時制現象を観察する。3 節では、本稿の説明の基盤となる一般的な時制理論として、和田の一連の研究（Wada 2001, 2009, 2010, 2011; 和田 2008, 2009, 2010, 2011, 2012）で採用されている合成的時制理論を概観する。この時制理論を採用するのは、すでにこの枠組みで英語と他の言語（日本語、ドイツ語、オランダ語）との時制現象の比較分析がなされており、本稿の目的に叶うためである。この枠組みの下、4 節では、英語の will- 文と未来時指示用法の単純現在形の時間構造ならびにフランス語の単純未来形と未来時指示用法の単純現在形の時間構造を構築し、5 節では、2 節で観察した事実は、これらの時間構造を基盤に据えた分析によって体系的に説明できることを見る。具体的には、英語の will は法助動詞で、フランス語の未来時制とは異なる点が両者の時制構造の相違に反映しており、それがこの 2 つの未来表現の異なる振る舞いを引き起こす根底にあるということ、⁴また、英仏語ともに単純現在形の時制構造は基本的に同じだ

が、「断定」のモダリティの時制解釈へのかかわり方の相違が両者の異なる振る舞いを引き起こすということを実証する。6節はまとめである。

2. 説明すべき事実

まず、英語の *will*-文とフランス語の単純未来形のどちらもが使える未来時言及の例をいくつか見ておこう。⁵ (本稿では、「状況」という言葉を「行為」・「出来事」・「状態」などを表すカバータームとして用いる。)

- (1) a. She will beat him easily.
 b. It will rain tomorrow.
 c. Tomorrow's weather will be cold and cloudy.
 d. They will be here in an hour.
 e. He will come back soon.
- (2) a. Elle le frappera facilement. (彼女はたやすく彼を殴るだろう。)
 b. Il pleuvra demain. (明日は雨が降るだろう。)
 c. Demain, le temps sera froid et nuageux. (明日の天気は寒くて曇りだろう。)
 d. Ils seront ici dans une heure. (彼らは1時間後ここにいるだろう。)
 e. Il reviendra bientôt. (彼はすぐに戻ってくるだろう。)

文脈によっては、例えば (e) のように、主語の意志を伴って解釈される可能性があるとしても、これらの例はすべて当該状況が未来時に生じるということを表している。

次に、英語とフランス語の単純現在形による未来時言及が可能な状況ならびに不可能な(難しい)状況について、その例をいくつか見てみる。(3)(4)をご覧いただきたい。

- (3) a. I retire from work next month.
 b. That plane flies to London at 5:30 tomorrow.
 c. He meets a flutist *(the day after tomorrow).
 Cf. He will meet a flutist.

- d. *The weather changes for the better (tomorrow).
Cf. The weather will change for the better.
- e. *She dies (next week).
Cf. She will die (next week).
- f. *I bring you a book when I come here next time.
Cf. I will bring you a book when I come here next time.
- (4) a. Je prends ma retraite le mois prochain. (私は来月退職する。)
b. Cet avion part demain à 5 h 30 pour Londres. (あの飛行機は明日 5 時半にロンドンへ向けて発つ。)
c. Il voit une flûtiste *(après-demain). (彼は明後日フルート奏者に会う。)
Cf. Il verra une flûtiste.
d. *Le temps s'améliore (demain). (明日は天気は良くなる。)
Cf. Le temps s'améliorera (demain).
e. *Elle meurt (la semaine prochaine). (来週、彼女は死ぬ。)
Cf. Elle mourra (la semaine prochaine).
f. *Je t'apporte un livre quand je viens la prochaine fois. (次にここに来るときは、本を一冊持ってきます。)
Cf. Je t'apporterai un livre quand je viendrai la prochaine fois.

英仏語ともに、(a) から (c) の例が示すように、単純現在形による未来時指示が可能な状況は、確定した予定・計画や時刻表などに基づく定められた未来の出来事などの場合であり、(d) から (f) の例が示すように、それ以外の場合は、will-文や単純未来形で表されるのがふつうである。また、単純現在形で未来時指示が可能な場合でも、通例、(c) の例が示すように、未来時を指す時の副詞類が必要である。

ここまでのデータを見る限り、英仏語の 2 種類の未来表現（未来形と単純現在形）の振る舞いには差がないように思えるが、実際には異なった振る舞いをする場合がある。本稿では、主に 3 つの言語環境における相違点を取り上げることにする。

まず、独立節における未来時言及の場合、英語では通例 will-文を用いなければならない場合で、フランス語では単純未来形はもちろんのこと、単純現在

形も可能であったり、英語ほど容認性が悪くなかったりすることがある。⁶

- (5) a. She will beat him easily. / *She beats him easily.
 b. It will rain tomorrow. / *It rains tomorrow.
 c. Tomorrow's weather will be cold and cloudy. / *Tomorrow's weather is cold and cloudy.
 d. They will be here in an hour. / *They are here in an hour.
 e. He will come back soon. / *He comes back soon.
- (6) a. Elle le frappera facilement./ Elle le frappe facilement. (彼女はたやすく彼を殴る (だろう)。)
 b. Il pleuvra demain./ ? Il pleut demain. (明日は雨が降る (だろう)。)
 c. Demain, le temps sera froid et nuageux./ ? Demain, le temps est froid et nuageux. (明日の天気は寒くて曇りだ (ろう)。)
 d. Ils seront ici dans une heure./ ? Il sont ici dans une heure. (彼らは1時間後ここにいる (だろう)。)
 e. Il reviendra bientôt. / Il revient bientôt. (彼はすぐに戻ってくる (だろう)。)

(5) (6) の各例のスラッシュの前の例が未来形、後の例が単純現在形である。

次に、時間節における時制形式の相違について見る。(7)が示すように、英語の時間節は未来時に言及する場合に単純現在形を用いるが、(8)が示すように、フランス語の時間節ではこの場合単純未来形(ただし、(8d)では前未来形)を用いる(当該時制形式には下線を引いてある)。⁷

- (7) a. You'll be tired when you arrive.
 b. While she is taking a rest, he will be able to read a little bit of the book.
 c. We intend to be a constructive opposition, but a vigorous one, especially when the rights and paramount obligations of parliament are involved. (Salkie 2010 : 198)
 d. It will be a lovely surprise for them both when they come in, ... (BNC A0D)

- (8) a. Tu seras fatigué quand tu arriveras.
(着くころには君はつかれているだろう。)
- b. Pendant qu'elle se reposera, il pourra lire un peu.
(彼女が休んでいる間、彼は少し読書ができるだろう。)
- c. Nous entendons faire une opposition constructive, mais énergique, surtout lorsque seront en jeu les droits et les attributions du Parlement. (Salkie 2010 : 198)
(我々は建設的な、しかし、力強い野党を作りたいと思っており、特に議会の権利や最高の義務が関係してくる場合はである。)
- d. «Ne soyez pas triste, ma chère bien-aimée. La vie est si belle à notre âge, et elle le sera plus encore pour nous lorsque nous aurons aboli tous les obstacles. Ne pleurez pas.»
(悲しむことはいらぬよ、愛しい人。ぼくたちの年ごろの人生は美しい。そして、すべての障害を乗り越えたときには、ぼくたちにとっては、もっと美しくなる。だから嘆かないで。)
(Maurice Leblanc, *La Comtesse de Cagliostro*, p.14)

最後に、英仏語の条件節における類似点と相違点を見る。まず、Dancygier (1998) が予測型条件文と呼ぶ、未来時における(直接的)因果関係を表す条件文においては、英仏語ともに、条件節(if・節・si・節)で単純現在形を用い、帰結節で未来形を用いる。このことは、(9)ならびに(10)が示すとおりである。

- (9) a. If John comes tomorrow, Bill will leave.
b. If the weather is fine tomorrow, we will go swimming.
c. *If John will come tomorrow, Bill will leave.
- (10) a. Si John vient demain, Bill partira. (もしジョンが明日来るなら、ビルは出発する(だろう)。)
b. S'il fait beau demain, nous irons nager. (明日晴れだったら、私たちは泳ぎに行きます。)
c. *Si John viendra demain, Bill partira.

しかしながら、Dancygier (1998) が非予測型条件文と呼ぶ、(直接的)因果

関係を表さない条件文（すなわち、条件節が帰結節で行う推論や発話行為の動機づけを表す条件文）の場合は、英語では条件節に will が生じることが可能であるのに対し、フランス語では条件節（si-節）に単純未来形が生じることが不可能である。これらは、(11)ならびに(12)が示すとおりである。

- (11) a. If the play will be cancelled, let's not go.
 b. If he'll be left destitute, I'll change my will.
- (12) a. *Si la pièce de théâtre sera annulée, n'y allons pas.
 b. *S'il sera dans l'indigence, je modifierai mon testament.

以上、本節では、英仏語の未来形ならびに単純現在形の未来時現象について、類似点と相違点を観察した。これらの現象を本当の意味で説明するには、統一的な視点を提供する枠組み、すなわち、一般的な時制理論に基づく分析が不可欠である。次節では、本稿が採用する一般的な時制理論として、和田の一連の研究で採用され、発展を遂げてきた合成的時制理論を概観する。⁸

3. 理論的背景

3.1. 絶対時制形式と相対時制形式

この時制理論では、まず、時制構造の観点から2種類の時制形式、すなわち、絶対時制形式 (Absolute Tense Form) と相対時制形式 (Relative Tense Form) を認めている。この2つの時制形式は、それぞれ、(13)のように定義される。

- (13) 絶対時制形式は絶対時制形態素 (A-形態素) を、相対時制形式は相対時制形態素 (R-形態素) をもつ時制形式である。

A-形態素 (A-morpheme) とは、「動詞に付随する文法的直示概念と一体化した時制形態素」のことであり、R-形態素 (R-morpheme) とは、「動詞に付随する文法的直示概念と一体化していない時制形態素」のことである。

具体例で確認してみよう。(14)をご覧ください。

- (14) {I have/She has/We have} arrived.

まず、助動詞 have には、いわゆる 3 人称・単数・直説法の場合を明示的に示す現在形があることから、英語には、動詞に付随する概念として、時制に連動して人称・数・法という文法的直示概念が存在すると假定できる。これら文法的直示概念と一体化した現在時制形態素 (-s で代表させる) は、定義上、A-形態素である。英語ではこの種の時制形態素をもつ動詞は定形動詞であるので、定形動詞が絶対時制形式ということになる。

一方、過去分詞 arrived には上で見たような文法的直示概念は付随しないので、過去分詞マーカー (-en で代表させる) は、定義上、R-形態素ということになる。なお、過去分詞マーカーをはじめとする英語の非定形マーカーは、本時制理論では一種の時制形態素として扱われる。これらは、時間解釈に関して、相対的時間関係を表すことができるからである。したがって、英語の非定形動詞は相対時制形式となる。

3.2. 時制構造と時制解釈

次に、英語の絶対時制形式と相対時制形式の時制構造 (Tense Structure) を概観する。動詞である以上必ず動詞語幹 (Verb Stem) をもつことを考えると、絶対時制形式では「A-形態素 + 動詞語幹」に、相対時制形式では「R-形態素 + 動詞語幹」に、時制構造構築要素は分解される。この 3 種類の要素は、各々、独自の時制構造情報を表す。まず、A-形態素は、文法的時間帯である「時間区域 (Time-sphere)」を表す。次に、動詞語幹であるが、これは「出来事時 (Event Time=E)」を表す。出来事時とは、当該述語の表す状況の関連部分があてはまっている時間 (Declerck 2006 の 'time of a predicated situation' に対応) のことである。最後に、R-形態素は、「出来事時と基準時 (Time of Orientation=O) との内在的な文法的時間関係」を表す。基準時とは、出来事時の位置を測るための中心 (起点) となる時点のことである。

この 3 つの要素のうち、A-形態素のみが絶対時制部門に入る要素である。なぜなら、ここでいう「絶対」という名称は、文法的直示概念が内包する直示的中心 (Deictic Centre) との絶対 (直接) 的關係に由来しているからである。したがって、これらの直示的概念とは直接関係しない R-形態素や動詞語幹は相対時制部門に入る要素ということになる。以上を念頭において、(14) で見た 2 種類の動詞、すなわち、定形動詞 have (絶対時制形式) と非定形動詞 arrived (相対時制形式) を時制構造構築要素の観点から分解すると、それぞれ、

動詞語幹 have⁻ + A⁻形態素 -s と動詞語幹 arrive⁻ + R⁻形態素 -en に分解され、(15) のように図式化される。

- (15) a. [R have⁻] + [A⁻s]
 b. [R arrive⁻ + -en]

下付き A の括弧と下付き R の括弧は、それぞれ、絶対時制部門と相対時制部門を表す。

上で見た観察から、定義上、英語には2種類の A⁻形態素、すなわち、現在時制形態素と過去時制形態素 (-ed で代表させる) が存在するので、絶対時制形式は2種類(現在形と過去形)存在する。現在時制形態素と過去時制形態素が表す時制構造情報である「時間区域」は、それぞれ、「現在時区域」と「過去時区域」である。「現在時区域」は「話者の時制視点 (Speaker's Temporal-viewpoint) を含む文法的時間帯」を、「過去時区域」は「話者の時制視点を含まない、すなわち、それよりも時間的に前に来る文法的時間帯」を意味する。話者の時制視点は、「文法的時間における直示的中心」であり、この視点がおかれる(時間軸上の)時点が絶対時制形式選択のための基点となる。絶対時制形式の出来事時は、点であろうと幅であろうと、必ず、この時間区域内に生じなければならない。

以上を基に、英語の現在形と過去形の時制構造を図式化したものが、図1である。

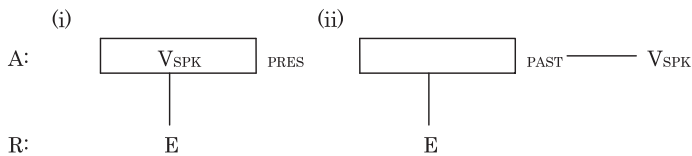


図1：絶対時制形式の時制構造 (i) 英語の現在形 (ii) 英語の過去形

本稿では、V_{SPK} は話者の時制視点を、PRES 付き長方形は「現在時区域」を、PAST 付き長方形は「過去時区域」を、E は出来事時を表す。また、図式における縦線ならびにコンマは2つの時間概念の同時関係(包含関係を含む)を、

横線は2つの時間概念の前後関係（一方が他方まで続いている場合も含む）を表す。AとRの横に位置付けられている時間概念のシンボルは、当該概念がそれぞれ絶対時制部門と相対時制部門に入ることを示す。

この文法的時間情報である時制構造が時間軸上に投射されると、実際の時間値（時制解釈値）を計算していくときの土台となる時間構造（Temporal Structure）が得られる。すべての時間計算の出発点は話者の意識（Speaker's Consciousness = C_{SPK} ）のある時点である。なぜなら、話者の意識は「発話や思考などのあらゆる認知活動の際に活性化している脳の一部」と定義されるからである。通例、同一話者の意識と（直示的）視点は同一時空間を占める。したがって、デフォルトの場合、話者の時制視点（直示的視点の一種）と意識は同一時空間を占める。話者の意識は、定義上、必ず発話時（Speech Time）に存在しなければならないので、デフォルトの場合、話者の時制視点は発話時におかれることになり、絶対時制形式は発話時基準で選択されることになる。現在形と過去形のデフォルトの場合の時間構造を図式化したものが、図2である。

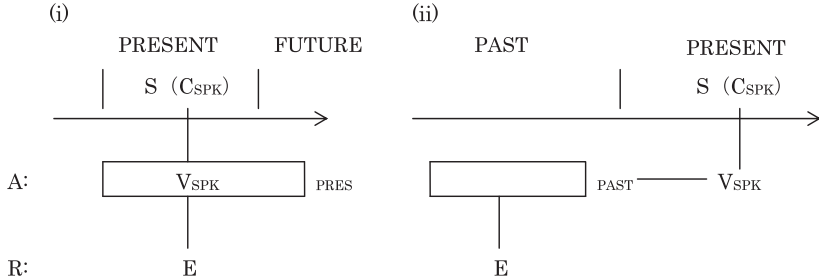


図2：絶対時制形式の時間構造（デフォルトの場合）

(i) 英語の現在形 (ii) 英語の過去形

この時間構造を基に、出来事時の特定化やアスペクト値の同定なども含めた、最終的な時間値を同定していくことになる。なお、デフォルトの場合、「現在時区域」は時間軸上の実際の時間帯（時間領域）である「現在時領域（PRESENT）」と「未来時領域（FUTURE）」に対応する一方、「過去時区域」は「過去時領域（PAST）」に対応する。（図中の矢印の上の縦線は時間領域を分けている。）

この対応関係は、以下のパラダイムによって例証される。

- (16) a. John is sick {now/*yesterday}
 b. The Orient Express leaves at 5:30 {tomorrow/*yesterday}.
 c. Hitomi played the cello {yesterday/*now/*tomorrow}.

なお、このパラダイムは、時制構造において出来事時が時間区域内に生じなければならないということも示している。例えば、過去形の場合、その時間区域である「過去時区域」はデフォルトの場合「過去時領域」に対応するが、その出来事時、例えば (16c) の「瞳がチェロを弾く」という出来事の関連部分に対応する時間は必ず「過去時領域」内に生じなければならないが、したがって、「過去時区域」内に生じていることになるからである。

次に、相対時制形式へと移る。英語には伝統的に 5 種類の非定形マーカ（現在分詞マーカの *-ing*・過去分詞マーカの *-en*・原形不定詞マーカの \emptyset ・*to*・不定詞マーカの *to*・動名詞マーカの *-ing*）が存在するので、本枠組みではこれに従い、5 種類の R- 形態素が存在すると仮定する。R- 形態素は出来事時 E と基準時 O との内在的な文法的時間関係を表すのであった。したがって、相対時制形式は、R- 形態素の種類によって、図 3 に表す 3 種類の文法的（あるいは論理的）時間関係のどれかを表す（文法的時間関係としては無指定である場合や複数表す場合もある）。

R: (i) E — O ; (ii) E , O ; (iii) O — E

図 3：相対時制形式の表す文法的時間関係

(i) 先行性 (ii) 同時性 (iii) 後続性

本稿の分析では、非定形マーカ自体がもつ抽象的な意味の中から（文法的）時間に関する情報が導き出されると考える。⁹ 例えば、本稿の分析に直接かかわってくる原形不定詞（Bare Infinitive）を例にとって考えてみよう。Duffley (1992, 2006) によると、原形不定詞は「当該状況を全体的に見る（始まりから終わりまで）」という抽象的な意味をもつので、ここから導き出される（文法的）時間関係は特に指定されない、すなわち、「無指定」である。しかしながら、動詞の仲間である以上、その特徴である「時間」という概念とは無関係ではいられないと仮定できる。したがって、R- 形態素としての原形不

定詞マーカー Ø は「無指定」という時制構造を表す。それゆえ、デフォルトの時間関係がないので、生起する言語環境の特徴に合う形で時間関係が特定化されるのである。

また、法助動詞の補部位置という、これも本稿の分析に直接かかわってくる言語環境においては、法助動詞が「潜在世界 (Potential World)」を構築するので、その補部状況はその世界内においてのみあてはまると考えられる。状態的状況 (状態述語の表す単一状況や動作・出来事述語が表す習慣的・総称的状況) の場合、その時間的等価性の特徴のため、潜在世界のどこにでもあてはまりうるので、法助動詞の表す時点にでもそれに続く時間帯にでもあてはまりうる。したがって、法助動詞の表す時点との時間関係でいえば、原形不定詞は同時関係も後続関係も表せる (実際の時間関係がどうなるかは、他の文要素や文脈次第である)。一方の非状態的状況 (動作・出来事述語が表す単一状況) の場合、その時間的非等価性の特徴のため (すなわち、生起 (状態変化) するのに一瞬であっても必ず時間が経ってしまうので)、原形不定詞が表す時点は法助動詞が表す時点よりも必ず後に生じることになる。したがって、後続関係を表すことになる。

相対時制形式の場合も、その時制構造が時間軸上に投射されることで時間構造が同定されるが、それは時制構造に内在化している基準時の同定によってなされる。例えば、基準時が発話時と同定されれば、「(文法的) 先行関係」をもつ相対時制形式は、その場合、出来事時が発話時に先行することになるので、時間構造としては「過去」を表すことになる。また、相対時制形式の時制構造は基準時と出来事時との時間関係であるので、基準時として同定された時間軸上の時点が、どの相対時制形式を選択するかを決めるための基点として働くことにもなる。したがって、話者の時制視点のような直示的中心をもたない相対時制形式の基準時の同定は、時制形式選択のための基点の同定をも兼ねており、生起する言語環境の特徴に合致する形で行われることになる。

なお、本節を終える前に、本分析は、仮説(17)を前提にしていることについておきたい (cf. 中右 1994 ; Janssen 1996)。

(17) 語彙動詞だけでなく助動詞も独自の出来事時を表せる。

したがって、上述の(14)の例は、定形である助動詞 *have* の出来事時と非定形である過去分詞 *arrived* の出来事時の2つの出来事時を含む文ということになる。

4. 英仏語の未来表現の時間構造

いまや英仏語の未来形ならびに未来時指示用法の単純現在形の時間構造を構築するための理論的基盤が出揃ったので、本節ではまず英語の2種類の未来表現の時間構造を概観し、次にフランス語の2種類の時間構造がどうなるのかを見ることにする。

4.1. 英語の未来表現の時間構造

4.1.1. will-文

はじめに、will-文の時間構造を概観する。本稿の枠組みでは will は法助動詞であり、定形動詞である。¹⁰ 仮説 (17) により、will-文には2つの出来事時、すなわち、will の出来事時 (E_1) と原形不定詞の出来事時 (E_2) が存在し、その時間構造は will の時制構造と原形不定詞 (inf.) の時制構造がそれぞれ時間軸上に投射されたものが合成して構築される。will-文の時間構造を図式化したものが、図4である。

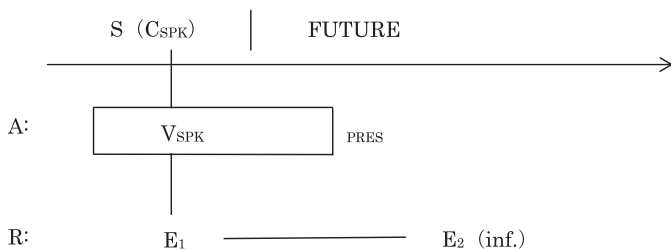


図4: will-文の時間構造

本稿の枠組みでは will は現在形なので、デフォルトの場合、図2 (i) と同じ時間構造をもつ (図4の左側部分に相当)。原形不定詞は、法助動詞の補部位置にあるので、状態的状况の同時解釈以外の場合は、その出来事時は will の出来事時よりも時間的に後続する (3節を参照)。デフォルトの場合、will の出来事時 (E_1) は発話時 (S) と同時なので、結果として、原形不定詞の出来事時 (E_2) は未来時にあてはまることになる。

本稿の枠組みでは、未来時指示の will-文は主に3種類の解釈を受ける。「意

志未来 (Volitional Future)・「予測未来 (Predictive Future)」・「単純未来 (Simple Future)」の3種類で、それぞれの例は (18a-c) に挙げられる。

- (18) a. I will be back before six.
 b. It will rain tomorrow.
 c. There will be a public holiday on Friday.

ただし、will 自体が3種類の異なる意味をもつという立場ではない。will 自体は「高い蓋然性 (High Probability)」という抽象的なコアの意味をもち、文の残りの要素や文脈などから、will が「主語の意志」を表すのか、「話者の予測」を表すのか、「単なる未来時言及」を表すのかが決まる。

例えば、(18a) の場合、主語が1人称で「6時までに戻る」という状況は主語によるコントロールが可能なタイプなので、主語の意志性に焦点が当てられる解釈が優勢となる。その結果、この解釈の下での will-文は「意志未来」となる。

同様に、(18b) では、主語が3人称かつ非有生であるうえ、「雨が降る」という状況は人間がコントロールできないタイプなので、話者の予測しかありえない。その結果、この解釈の下での will-文は「予測未来」となる。この場合、will は「予測」のモダリティを表すが、「予測」とは「命題内容 (記述・描写される状況) をしかるべき根拠でもって推測する」際の話者の心的態度のことをいう。ちなみに、「しかるべき根拠」とは、経験や何らかの根拠、通則などのことである。

「単純未来」は、命題内容が予測という心的態度が向けられる対象としてふさわしくないほど確実に未来に生じる場合に出てくる解釈である。¹¹ 例えば、(18c) では、「休日が金曜日に当たる」という状況は暦上決まっていることであり、主語の意志も関与しないし、話者が「予測」する対象でもない。この場合、will は意味内容の希薄なプレースホルダー的存在となり、未来時に生じる原形不定詞の出来事時を測るための基準時としての役割のみを果たす (自らは中身のある状況の出来事時としては振る舞わない)。なお、「単純未来」の解釈か「予測未来」の解釈かを区別するテストとして、当該 will-文が単純現在形で言い換えられてもほとんど意味が変わらない場合が「単純未来」であり (次節の (19c) を参照)、意味が変わったり容認されない場合は「予測未来」である (次節の (19b) を参照)。

「主語の意志」が反映する状況は実現しやすいし、上で見た定義の下での「予

測」対象は実現する可能性が高い。また、「単純未来」の場合の命題内容はそもそも実現が確実視される場合であるので、ここで考察している will の 3 種類の解釈はすべて「高い蓋然性」というコアの意味から出てくるという主張と合致する。¹²

4.1.2. 未来時指示用法の単純現在形

次に、未来時指示用法の単純現在形の時間構造へと移る。まず、単純現在形で表される動詞は定形である。また、法助動詞や法副詞などのモダリティ表現を伴わない動詞形態は、非モダル形式と呼ばれる。ここで重要なのは、非モダル形式の定形動詞は、(主節において)「断定」のモダリティを伝達するという点である。「断定」のモダリティとは、「命題内容(記述・描写される状況)を事実として断ずる」際の話者の心的態度のことである。¹³

未来時指示用法の単純現在形は、解釈の際、この「断定」のモダリティを伴って解釈されるため、その定義に合うような場合にしか使用できない。すなわち、原則として、Goldsmith & Woisetschlaeger (1982) のいう意味での「世界の構造 (Structure of the World)」を構成すると解釈できる場合にしか、単純現在形による未来時指示はできない。「世界の構造」を構成する状況とは、例えば、時刻表や暦など公的に定まったものに基づいて生じる状況や、個人的なことでもすでに決定され、定まっている計画などのことである。以上の観察を基に、未来時指示用法の単純現在形の時間構造を図式化したものが、図 5 である。

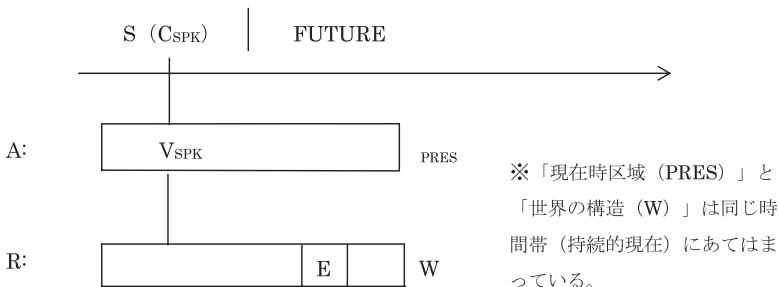


図 5：英語の単純現在形文の未来時指示用法の時間構造

相対時制部門 (R) では、当該状況の出来事時 E は世界の構造 W があてはま

る時間帯内に生じていることが示されている。

具体例で見てみよう。この図式が表す特徴に合う (19a, c) は容認されるが、合わない (19b) は容認不可能となる。

- (19) a. The Orient Express leaves at 5 :30 tomorrow.
 b. *It rains tomorrow.
 c. There is a public holiday on Friday.

時刻表に基づいた未来状況・「オリエント急行の出発」も (19a), 暦に基づいた未来状況・「祝日が金曜日に当たること」も (19c), とともに, 上述の意味での「世界の構造」を構成する状況として解釈できるので, 単純現在形による未来時指示が可能である。しかしながら, 天候の様子などは「世界の構造」の一部にはなれない (19b)。したがって, 単純現在形での未来時指示は許されない。同様の切り口で, 2 節で見た (3) の単純現在形の容認性の差異も説明できる。

4.2. フランス語の未来表現の時間構造

次に, フランス語の 2 種類の未来表現, すなわち, 単純未来形と未来時指示用法の単純現在形の時間構造を構築する。

4.2.1. 定形動詞と「現在時区域」・「未来時区域」

まずは, 単純未来形からである。本稿の枠組みでは, 英語と同様フランス語でも, 定形動詞は A- 形態素を, 非定形動詞は R- 形態素をもつ。このことは, 以下のパラダイムから証明される。

- (20) J'ai donné/Elle a donné/Nous avons donné.¹⁴

(20) では, avoir 'have' は主語の人称ならびに数に応じて語形変化している (ここでは不規則変化である)。これらの変化形は直説法の現在形のものである。したがって, フランス語の現在時制形態素 (1 人称単数直説法単純現在形の屈折辞 -e で代表させる) は A- 形態素ということになる。一方, donné は donner 'give' の過去分詞形であり, 人称・数・法と一体化した屈折形がないことから, 過去分詞マーカー (-é で代表させる) は, 定義上, R- 形態素である。この 2 つの動詞を時制構造構築要素の観点から分解したものが, (21) である

(avoir- と donne- は動詞語幹を表す)。

- (21) a. [R avoir-] + [A -e]
 b. [R donne- + -é]

したがって、フランス語でも定形動詞が絶対時制形式であり、非定形動詞が相対時制形式であるといえる。

この観点から考察した場合、フランス語には定形動詞に付随する未来時制形態素 (1 人称単数直説法単純未来形の屈折辞 -rai で代表させる) が存在することになる (例: prendre ‘take’ の 1 人称単数直説法単純未来形は prendrai)。したがって、フランス語には、英語と違って、A- 形態素としての未来時制形態素が存在し、それは「未来時区域」を表す。

この帰結は、次のような疑問点を引き起こすことになる。すなわち、「未来時区域」とはどのような文法的時間帯なのか。とりわけ、デフォルトの場合に「未来時領域」をもカバーする「現在時区域」とはどのような違いがあるのか。

結論から述べると、フランス語の「現在時区域」と「未来時区域」は文法的時間帯としては同じ時間帯を表し、デフォルトの場合 (話者の時制視点が発話時におかれる場合) は、ともに「現在時領域」と「未来時領域」を含む。この主張は、次のパラダイムによって支持される。

- (22) a. Il pleuvra demain. (=2b) [単純未来形の未来時指示]
 b. ?Ce sera le plombier.¹⁵ (あれは配管工だろう。) [単純未来形の現在時指示]
- (23) a. Cet avion part demain à 5 h 30 pour Londres. (=4b) [単純現在形の未来時指示]
 b. J'écris en ce moment. (今手紙を書いています) [単純現在形の現在時指示]

(22) から、単純未来形は「未来時領域」に加え「現在時領域」にも、(23) から、単純現在形は「現在時領域」に加え「未来時領域」にも言及できることがわかる。

しかしながら、フランス語の「現在時区域」と「未来時区域」が全く同じ意味情報をもつのならば、言語の経済性に鑑みて、一方は不要になるはずである。したがって、この 2 つの時間区域にはどこか違いがあると考えるべきである。

この立場の下、本稿では以下の仮説を立てる。

- (24) 時制構造において、フランス語の「現在時区域」には「断定」のモダリティが、「未来時区域」には「予測」のモダリティが貼りついている。

仮説(24)が示唆しているのは、フランス語の単純現在形と単純未来形にはそれぞれ「断定」と「予測」のモダリティが貼りついた形で文法化しているということである。これを図式化したのが、図6である。

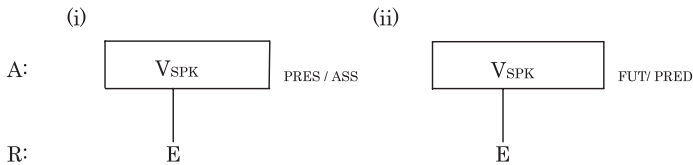


図6: (i) 仏語の単純現在形 (絶対時制形式) (ii) 仏語の単純未来形 (絶対時制形式)

FUT付き長方形は「未来時区域」を表し、ASSとPREDは、それぞれ、文法化して時間区域に貼りついた「断定」と「予測」のモダリティを表す。

では、「現在時区域」と「断定」のモダリティ、「未来時区域」と「予測」のモダリティという組み合わせになるのはなぜか。これは、デフォルトの場合に、両時間区域ともに「現在時領域」と「未来時領域」に言及できるとはいえ、名前が示すように、「現在時区域」は現在時指向、「未来時区域」は未来時指向が強いからである。すなわち、モダリティがあてはまる時点である発話時から見て、それと同時間帯である「現在時領域」に生じる状況については、通例、断定するし、それより後続する時間帯である「未来時領域」に生じる状況については、通例、予測するからである。まとめると、フランス語では、文法化した「断定」のモダリティと結びついている「現在時区域」をもつ単純現在形は、通例、断定できる時間帯である「現在時領域」内の状況に言及しやすいが、文法化した「予測」のモダリティと結びついている「未来時区域」をもつ単純未来形は、通例、予測する時間帯である「未来時領域」内の状況に言及する。¹⁶

特に、フランス語の単純未来形のもつ「未来時区域」のこの特徴は、「未来時区域」をもたない英語の will-文との相違点を浮かび上がらせることにな

る。まず、デフォルトの場合（話者の時制視点が発話時におかれる場合）、フランス語の単純未来形は現在時をはっきりと指し示す副詞類とは共起しないが（Hornstein 1990 : 19 ; Celle 2004/2005 : 184 ; cf. 渡邊 2013）、英語の will-文の場合は可能である。

- (25) a. *Jean se couchera maintenant. (ジャンは今寝るだろう。) (単純未来)
 b. *Jean partira maintenant. (ジャンは今出発するだろう。) (単純未来)

(Hornstein 1990 : 19)

- (26) a. They will pay nothing more now, but will have the delay interest on at least two mortgage rate rises to account for when the new yearly rates are fixed early in 1990.

(BNC A2V)

- b. I will leave now, mademoiselle. (BNC HGD)

上の図 4 で見たように、英語の will-文の時間構造には「未来時区域」が存在しないため、now は「現在時領域」の時点を指しはするが、発話時と同時点である will の表すモダリティがあてはまっている時点よりは後続する時点と解釈される。したがって、原形不定詞の出来事時 (E_2) は will の出来事時 (E_1) よりも後続するが、依然として「現在時領域」内にあると解釈され、その結果、現在時を指す時の副詞 now と共起できると説明できる。一方のフランス語の単純未来形は「未来時区域」をもち、文法化した「予測」のモダリティを伴っているために、「未来時領域」指向という特徴をもつ。¹⁷したがって、現在時を指す時の副詞 maintenant とは共起しないと説明できる。¹⁸

また、上述のフランス語の「未来時区域」に関する特徴は、フランス語の単純未来形を現在時指示の推量用法として使える場合でも、英語の will-文よりも制約が多いことも説明できる。より具体的にいえば、フランス語の単純未来形の現在推量用法は、(i) 発話状況への関連がはっきり確立され、(ii) 未来時における立証 (Future Verification) が可能な場合にのみ許されるのだが、これらにより、フランス語の単純未来形は基本的には未来時指示であるのが、文脈上ははっきりと現在時指示であることが明白である場合にのみ、この用法が許されると説明できる。例えば、(27) をご覧いただきたい。

(27) On sonne ; ce sera le facteur.

(Celle 2004/2005 : 192 ; cf. 渡邊 2009, 2013) ¹⁹

([ベルが鳴る] あれは郵便屋さんだろう。)

(27)では、当該人物が郵便屋かどうかはドアを開けるなどしてすぐに立証可能であるし、ベルが鳴る状況下での発話ということから発話状況への関連が明らかであるので、単純未来形が現在推量用法として用いられているといえる。ただし、上で見た(22b)の容認性が若干低いことが示すように、現在推量用法についてはその容認性は母語話者によっても違う可能性があり、また、上で見た現在推量用法に必要な2つの条件を想定できるか否かによるのかもかもしれない。²⁰

4.2.2. 単純未来形

前節では、フランス語の2種類の未来表現の時間構造を構築するために必要な議論を行った。本節では、まず、単純未来形の時間構造を構築する。同じ未来形に分類される英語のwill-文と違って、フランス語の単純未来形は、(i)「未来時区域」をもち、(ii)出来事時を1つしか含まない。上で見たように、デフォルトの場合(話者の時制視点が発話時におかれる場合)、「未来時区域」は「現在時領域」と「未来時領域」をカバーするため、単純未来形の出来事時は「未来時領域」に生じる場合(未来時指示)と「現在時領域」に生じる場合(現在時指示)がある。

まずは、単純未来形の未来時指示用法から見てみよう。図7は、その時間構造を図式化したものである。²¹

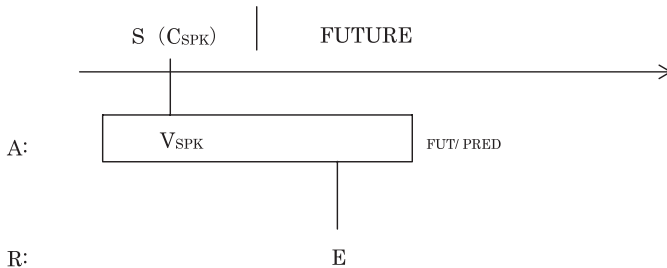


図7：仏語の単純未来形文の時間構造（未来時指示）

まず、「予測」のモダリティが貼りついた時間区域（文法的時間帯）である「未来時区域」が時間軸上に投射されると、「予測」のモダリティの特徴から、無標の場合、未来時指示となる。この場合、当該出来事は「未来時領域」に生じることになる。

具体例で考察してみよう。(28)をご覧いただきたい(下線部は筆者による)。

- (28) a. «Oh ! lui, il [=Jérôme] aimera toujours le travail. »
 (aimer 'love' の 3 単直単未)
 (うん、あの子 [=ジェローム] はいつまでも勉強が好きでいるだろうよ。) (André Gide, *La Porte Étroite*, p.508)
- b. Elle [=Alissa] reprit : «Est-ce que tu crois qu'il deviendra quelqu'un de remarquable? »
 (devenir 'become' の 3 単直単未)
 (アリサはつづけた。「偉い人になるだろうとお思いになって?」) (André Gide, *La Porte Étroite*, p.508)
- c. «Ne soyez pas triste, ma chère bien-aimée. La vie est si belle à notre âge, et elle le sera plus encore pour nous lorsque nous aurons aboli tous les obstacles. Ne pleurez pas. »
 (être 'be' の 3 単直単未)
 (悲しむことはいらぬよ、愛しい人。ぼくたちの年ごろの人生は美しい。そして、すべての障害を乗り越えたときには、ぼくたちにとっては、もっと美しくなる。だから嘆かないで。)
 (Maurice Leblanc, *La Comtesse de Cagliostro*, p.14)
- d. Quel sort que celui d'un romancier sans personnages. Peut-être un jour en sera-t-il ainsi pour tous. Nous n'aurons plus de personnages. Nous deviendrons des auteurs en quête de personnages. Le roman ne sera peut-être pas mort, mais il n'y aura plus de personnages. Difficile à s'imaginer un roman sans personnages. Mais tout progrès, si progrès il y a, n'est-il pas difficile à l'imaginer ?²² (être 'be' の 3 単直単未, avoir 'have' の 1 複直単未, devenir 'become' の 1 複直単未, avoir 'have' の 3 単直単未)
 (登場人物をもたない小説家の運命はどんなものだろうか。い

つかはみんなそうなるかもしれない。もはや登場人物をもたなくなるだろう。われわれは登場人物を探す作家たちになるだろう。小説は死んでしまいはしないかもしれないが、登場人物がもはやいなくなるのだ。登場人物なき小説，それは想像しがたい。しかし，あらゆる進歩は—もし進歩というものがあるとするなら—，想像しがたいものではなからうか。）

(Raymond Queneau, *Le vol d'Icare*, Folio, p.91)

例えば，(28a)の場合，*aimera* は *aimer* 'love' の3人称単数直説法単純未来形で，定義上，A-形態素である未来時制形態素をもつため，「未来時区域」をもつ。当該状況は，文脈から，話者が（語用論的には，現在から続くと推測される）未来の状況について予測している内容といえるので，出来事時は「未来時領域」に生じる。その結果，英語の「予測未来」の解釈をもつ will-文に，解釈上対応することになる。

次に，単純未来形の現在時指示用法であるが，その時間構造を図式化したものが，図8である。

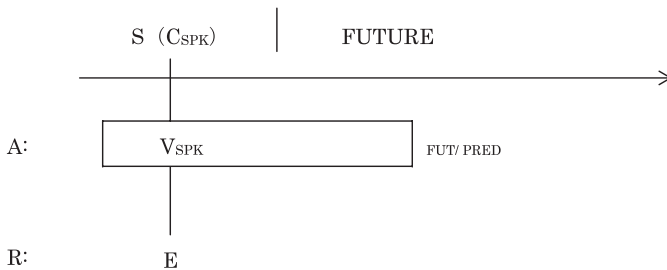


図8：仏語の単純未来形文の時間構造（現在時指示）

未来時指示用法との唯一の違いは，出来事時が「現在時領域」（発話時 S を含む時間帯）に生じている点である。具体例で観察してみよう。(27)をもう一度ご覧いただきたい。

- (27) On sonne ; ce sera le facteur. ([ベルが鳴る] あれは郵便屋さんらう。)

sera は être ‘be’ の 3 人称単数直説法単純未来形で、定義上、A- 形態素である未来時制形態素をもつため、「未来時区域」をもつ。ここでは、現在推量用法に必要な条件であった、発話状況への関連性と未来時における立証性が満たされているので、出来事時が「現在時領域」に生じる解釈が可能となる。「未来時区域」に貼りついている「予測」のモダリティの特徴から現在時指示は有標になるが、この用法に必要な条件を満たさないとこの解釈が難しいことから、本稿の考え方の妥当性が裏付けられる。

4.2.3. 未来時指示用法の単純現在形

次に、フランス語の単純現在形による未来時指示用法の時間構造の構築に移るが、基本的には英語の単純現在形と同じ時間構造をもつ。すなわち、非モデル形式である現在形の定形動詞は「現在時区域」をその時制構造内にもつが、デフォルトの場合（話者の時制視点が発話時におかれる場合）、その「現在時区域」は「現在時領域」と「未来時領域」をカバーする。主節における非モデル形式は「断定」のモダリティを伴うので、出来事時が「未来時領域」に生じる場合には制限がある。すなわち、単純現在形によって表される当該状況は「世界の構造」を構成する一部と解釈できるタイプでなければならない。ただ 1 点、英語の場合と異なるのは、フランス語の「現在時区域」には「断定」のモダリティが貼りついている点であるが、この点は後に詳しく見る。

以上の観察から、フランス語の未来時指示用法の単純現在形の時間構造は、図 9 のようになる。

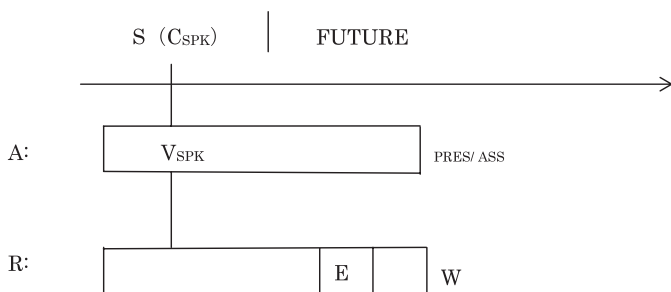


図 9：仏語の単純現在形文の未来時指示用法の時間構造

この時間構造は、2 節で見た (4) の未来時指示用法の単純現在形の容認性の

差異を説明できることから正当化される。以下に(4)を再掲する。

- (4) a. Je prends ma retraite le mois prochain. (私は来月退職する。)
 b. Cet avion part demain à 5 h 30 pour Londres. (あの飛行機は明日5時半にロンドンへ向けて発つ。)
 c. Il voit une flûtiste *(après-demain). (彼は明後日フルート奏者に会う。)²³
 Cf. Il verra une flûtiste.
 d. *Le temps s'améliore (demain). (明日は天気は良くなる。)
 Cf. Le temps s'améliorera (demain).
 e. *Elle meurt (la semaine prochaine). (来週、彼女は死ぬ。)
 Cf. Elle mourra (la semaine prochaine).
 f. *Je t'apporte un livre quand je viens la prochaine fois. (次にここに来るときは、本を一冊持ってきます。)
 Cf. Je t'apporterai un livre quand je viendrai la prochaine fois.

例えば、(4a)では、すでに決定済みの確定した個人的な予定の描写であるので、話者にとっては自分を取り巻く「世界の構造」の一部と解釈することは可能である。したがって、あたかも事実であるかのように断定することが可能となり、その結果、単純現在形の使用が可能となる。一方の(4d)の場合であるが、天候がどうなるかは人間が確定したり断定したりできるタイプの状況ではない。したがって、単純現在形は使用できない。以上の観察から、フランス語の単純現在形に「断定」のモダリティが伴っていること、ならびに、フランス語の単純未来形に「予測」のモダリティが伴っていることが推察できる。

5. 英仏語の未来表現の相違点の説明

いまや英仏語の未来表現の相違点の説明に必要な道具立てがすべて出揃ったので、本節では具体的説明に移る。

5.1. 単純現在形による未来時指示

はじめに、英語の単純現在形による未来時指示のほうがフランス語の単純現

在形による未来時指示に比べて制限が強いのはなぜかについて考察する。このことを示す例(5)(6)を以下に再掲する。

- (5) a. She will beat him easily. / *She beats him easily.
 b. It will rain tomorrow. / *It rains tomorrow.
 c. Tomorrow's weather will be cold and cloudy. / *Tomorrow's weather is cold and cloudy.
 d. They will be here in an hour. / *They are here in an hour.
 e. He will come back soon. / *He comes back soon.
- (6) a. Elle le frappera facilement. / Elle le frappe facilement. (彼女はたやすく彼を殴る(だろう)。)
 b. Il pleuvra demain. / ? Il pleut demain. (明日は雨が降る(だろう)。)
 c. Demain, le temps sera froid et nuageux. / ? Demain, le temps est froid et nuageux. (明日の天気は寒くて曇りだ(ろう)。)
 d. Ils seront ici dans une heure. / ? Il sont ici dans une heure. (彼らは1時間後ここにいる(だろう)。)
 e. Il reviendra bientôt. / Il revient bientôt. (彼はすぐに戻ってくる(だろう)。)

本稿の分析では、この差異は英仏語の未来時指示用法の単純現在形の時間構造の相違(図5と図9)に原因があると主張することになる。より具体的にいえば、「断定」のモダリティが「現在時区域」とは融合しておらず、時制構造からは独立した形で存在するのか、「現在時区域」に文法化された形で貼りついているのか、の違いに因ると主張する。

英仏語の単純現在形の「断定」のモダリティとそれを伝達する定形動詞の時制構造構築要素との関係を図式化したものが、(29)である。

- (29) a. <英語> 現在形の定形動詞 + zero形式 (ASS「断定」)
 e.g. rain: [_V動詞語幹(rain-) +A-形態素(-s)] + [zero (ASS)]
 b. <仏語> 現在形の定形動詞 (ASS「断定」)
 e.g. pleuvoir: [_V動詞語幹(pleu-) +A-形態素(-e) & ASS]

まず、英語では、「断定」のモダリティが動詞（V）の外側にある zero 形式（明示的な形はもたないが、法助動詞とパラディグマティックな位置関係にあることから想定される目に見えないモダリティ伝達形式）に結びついている点に注意されたい。このことは、英語の「断定」のモダリティは、現在時制形態素 -s が表す「現在時区域」を含む定形動詞の時制構造構築要素全体をその射程（スコープ）内に収めることができる（zero 形式のほうがより広いスコープを取る）ということの意味する（技術的な側面はさておき、いわゆるモダル・スコープの考え方をイメージしていただきたい）。このことが、英語の単純現在形の未来時指示の時制解釈に強い影響を及ぼす。スコープの関係上、「断定」のモダリティが現在形の定形動詞語幹、すなわち、その出来事時に影響を与えるため、当該状況（出来事時に結びついた状況）自体が「断定」の影響を受けることになるからである。したがって、(5)の単純現在形の非文性が示すように、当該状況自体が客観的に見て「断定」できるような状況（すなわち、「世界の構造」の一部を構成するような状況）でなければ、単純現在形による未来時指示は不可能であると説明できる。

一方のフランス語では、「断定」のモダリティは、動詞（V）の「内部」にあり、出来事時とともに、定形動詞の時制構造を構築する要素である「現在時区域」に貼りついている。したがって、「断定」の影響が及ぶのは A-形態素が表す「時間区域」のみであり、出来事時にはその影響は及ばないということになる。それゆえ、当該状況自体が客観的に「断定」できるような状況であるか否かというよりは、話者（時制形式の選択者）が、単純未来形との対比において、「予測」ではなく「断定」という心的態度でもって未来時状況に言及する場合に、単純現在形が使用されることになる。

以上の議論を要約すれば、英語の単純現在形による未来時指示の場合は、当該状況自体が断定対象になるタイプか否かが問題になるのに対して、フランス語の単純現在形による未来時指示の場合は、話者の心的態度が断定であれば使用可能である、ということになる。本稿の枠組みでは、この差が(5)(6)の英仏語の単純現在形の未来時指示に関する容認性の差になって現れているということになる。

5.2. 時間節における時制形式

次に、未来時言及の時間節において、英語では単純現在形が要求されるのに対して、フランス語では単純未来形が要求されるのはなぜかについて説明する。

まず、このことを示す例(7)(8)を以下に再掲する。

- (7) a. You'll be tired when you arrive.
 b. While she is taking a rest, he will be able to read a little bit of the book.
 c. We intend to be a constructive opposition, but a vigorous one, especially when the rights and paramount obligations of parliament are involved.
 d. It will be a lovely surprise for them both when they come in, ... (BNC A0D)
- (8) a. Tu seras fatigué quand tu arriveras.
 (着くころには君はつかれているだろう。)
 b. Pendant qu'elle se reposera, il pourra lire un peu.
 (彼女が休んでいる間、彼は少し読書ができるだろう。)
 c. Nous entendons faire une opposition constructive, mais énergique, surtout lorsque seront en jeu les droits et les attributions du Parlement.
 (我々は建設的な、しかし、力強い野党を作りたいと思っており、特に議会の権利や最高の義務が関係してくる場合はである。)
 d. «Ne soyez pas triste, ma chère bien-aimée. La vie est si belle à notre âge, et elle le sera plus encore pour nous lorsque nous aurons aboli tous les obstacles. Ne pleurez pas.»
 (悲しむことはいらぬよ、愛しい人。ぼくたちの年ごろの人生は美しい。そして、すべての障害を乗り越えたときには、ぼくたちにとっては、もっと美しくなる。だから嘆かないで。)

この点を説明するためには、英仏語の未来表現の時制構造・時間構造の差異ならびに時間節という言語環境の特徴を考えなければならない。まず、時制構造・時間構造から見ていく。英語の will-文とフランス語の単純未来形のそれぞれの時制構造・時間構造から「予測未来」の解釈が導き出されるメカニズムは、すでに上で見たとおりである。英語のほうは will が法助動詞で、文脈からそれが「予測」のモダリティを表すと解釈され、それにより原形不定詞の出

来事時が未来に生じると予測されるのであった。それに対し、フランス語のほうは、単純未来形が表す「未来時区域」に「予測」のモダリティが文法化して貼りついているため、通例、予測の対象となる未来時の状況を表すのが無標の場合ということであった。

しかし、英仏語の未来形が「予測未来」ではなく、「単純未来」の解釈を受ける場合はどうであろうか。英語の場合は、すでに 4.1.1 節で見たように、命題内容に主語の意志が関与せず、「予測」という心的態度の対象になるのにふさわしくないほど確実に未来に生じると考えられる場合に、「単純未来」の解釈が得られるのであった。しかしながら、「未来時区域」に文法化した「予測」のモダリティが貼りついているフランス語の単純未来形の場合はどうであろうか。4.1.1 節で見た英語版のテストをフランス語にも当てはめると、(30) の単純未来形の例は単純現在形に言い換え可能なので、「単純未来」の解釈を受けるといえる。

- (30) a. Il aura deux ans demain. (単純未来) (彼は明日 2 歳になる。)
/ Il a deux ans demain. (単純現在)
- b. Demain, ce sera dimanche. (単純未来) (明日は日曜日だ。)
/ Demain, c'est dimanche. (単純現在)
- c. Ce sera férié vendredi. (単純未来) (金曜日は休日に当たる。)
/ C'est férié vendredi. (単純現在)
- d. L'année 1982 sera bissextile. (1982 年は閏年です)

(cf. 青木 1998 :115)

ここで、フランス語の「未来時区域」に文法化して貼りついている「予測」のモダリティはどうなるのかという疑問が生じてくる。「単純未来」というのは、命題内容が予測するのにふさわしくないほど確実に未来に生じるといえる場合の解釈だからである。

この点に対して、われわれは以下の仮説を提案する。

- (31) 時制構造において文法化して時間区域に貼りついているモダリティは、時制解釈の段階で「背景化」することがある。

ここでいう「背景化」とは共時的なレベルの「意味漂白 (Semantic

Bleaching)」のことであり、当該時間区域をもつ時制形式が生起する言語環境の影響を受けて、当該モダリティがその時制解釈に関与（影響）しなくなる現象を指す。仮説(31)により、フランス語の単純未来形が「単純未来」の解釈を受ける場合は、その「未来時区域」に文法化して貼りついていた「予測」のモダリティが解釈時に背景化し、その結果、「未来時区域」の無標の場合の解釈である「未来性」のみが解釈に関与してくることになる。これによって、フランス語の単純未来形の場合も、(30)のような「単純未来」の例の場合も、その命題内容に対する「予測」のモダリティが解釈には伴わない（実質的には関与しない）ことが説明できる。この点を図式化したのが、図10である。

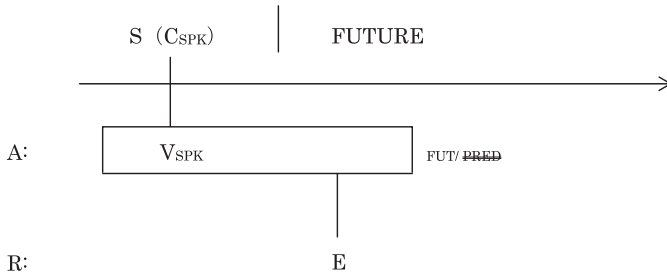


図10：仏語の単純未来形文の時間構造（単純未来解釈）

以上の観察を念頭において、時間節における時制形式選択の違いに立ち戻ると、時間節という言葉環境が仮説(31)を発動させると主張できる。時間節はAllen (1966) のいう「拘束節」であり、和田 (2011) のいう「意味的に不完全な節」である。この種の節は、主節から独立したモダリティ表現が現れないという言葉環境の特徴をもつ。この時間節の特徴は、次の英語のパラダイムによって例証される。

- (32) a. *{When/Before/After} Mary will arrive, John will leave.
 b. {When/Before/After} Mary arrives, John will leave.

(32b)の時間節中の現在形 arrives は、(32a)が示すように、パラディグマティックに法助動詞を許さないことから、「断定」のモダリティを伴っていないと推測できる。

このことは、フランス語の時間節にもあてはまる。フランス語では、まず、未来時言及の無標の場合は単純未来形による未来時指示であった。したがって、上に再掲した(8)の下線部が示すように、時間節において単純未来形が選択されている。次に、この言語環境の特徴のため、「未来時区域」に文文化して貼りついていた「予測」のモダリティが背景化する。すなわち、主節における「単純未来」の解釈の場合と同様、仮説(31)が適用され、その結果、「予測」のモダリティが時制解釈に関与しなくなる。

以上から、フランス語の時間節において単純未来形が用いられるのはなぜか、また、英語では時間節において単純現在形が用いられるのはなぜかという問いに対して、それぞれのもつ時制構造・時間構造の差異と時間節という言語環境の特徴の相互作用に因るためと説明できる。

5.3. 条件節における時制形式

最後に、(未来時に言及する) 予測型条件文については、英仏語ともに条件節では単純現在形が用いられ、帰結節では(基本的に)未来形(will・文・単純未来形)が用いられるのに対して((33)を参照)、非予測型条件文については、英語では条件節に will を用いることが可能な場合があるが、フランス語では原則として単純未来形の使用は不可能である((34)(35)を参照)という点を考察する。

- (33) a. Si John vient demain, Bill partira. (=10a)
'If John comes tomorrow, Bill will leave.'
- b. *Si John viendra demain, Bill partira. (=10c)
'*If John will come tomorrow, Bill will leave.'
- (34) a. *Si la pièce de théâtre sera annulée, n'y allons pas. (=12a)
- b. *S'il sera dans l'indigence, je modifierai mon testament.
(=12b)
- (35) a. If the play will be cancelled, let's not go. (=11a) [(34a)の
仏語文に対応]
- b. If he'll be left destitute, I'll change my will. (=11b) [(34b)
の仏語文に対応]

この点を説明するために、以下の仮説を提案する。

- (36) 条件節マーカーの種類によって、主節状況との因果関係の強さの度合いに違いがある。

この仮説の下、英語の条件節マーカー *if* は、主節との因果関係の度合いについては、強いもの（いわゆる、予測型条件文）から弱いもの（いわゆる、非予測型条件文）まで表せるため、*if* 節は前者の場合は拘束節（2節の(9)の例）、後者の場合は Allen（1966）のいう「自由節」（または、和田 2011 のいう「意味的に自己完結した節」）に対応する（(35)の例）。

一方、フランス語の条件節マーカー *si* は主節との強い因果関係を表すため、*si* 節は必ず拘束節、すなわち、意味的に不完全な節になると仮定する。このタイプの節は自らのモダリティを伴うことができないため、意味的にも強く主節に依存することになる。このことは、*si* 節には法助動詞や法副詞が原則として生じえないことから支持される。

- (37) a. *S'il {peut/doi}t pleuvoir demain, je resterai à la maison.
'(Lit.) If it {can/must} rain tomorrow, I'll stay home.'
- b. *S'il {peut/doi}t venir demain, je n'irai pas là-bas.
'(Lit.) If he {can/must} come tomorrow, I will not go there.'
- c. *Si Marie vient {certainement/probablement} demain,
Charles travaillera dans le jardin.
'(Lit.) If Marie {certainly/probably} comes tomorrow, Charles
will work in the garden.'

仮説(36)は英仏語の条件節マーカーの違いを説明するためだけの *ad hoc* なものではない。例えば、ドイツ語の条件節マーカー *wenn* はフランス語の *si* と同じような振る舞いをするのに対して、オランダ語の条件節マーカー *als* は英語の *if* と同じような振る舞いをする。(38)は未来時指示のドイツ語の条件文の例、(39)は未来時指示のオランダ語の条件文の例である。

- (38) a. Wenn Emma morgen kommt, {wird/kann/muss} Hans
abfahren.
(もしエマが明日来るのなら、ハンスは{去るだろう/去る可

能性がある / 去らなければならない}。)

- b. *Wenn das Stück abgesetzt werden wird, gehen wir nicht hin!

(もし劇がキャンセルされることになるなら、行かないでおこう!)

- c. ?Wenn er am Ende pleite sein wird, werde ich mein Testament ändern.

(もし彼が困窮していることになるなら、私は遺書を変える(つもりだ)。

- (39) a. Als Jan morgen komt, {zal/kan/moet} Marie vertrekken.

(もしヤンが明日来るのなら、マリーは{去るだろう / 去る可能性がある / 去らなければならない}。)

- b. Als het toneelstuk afgelast zal worden, (wel,) laten we gewoon thuisblijven.

(もし劇がキャンセルされることになるなら、家にいよう!)

- c. Als hij behoeftig zal achterblijven, (wel, dan) zal ik m'n testament veranderen.

(もし彼が困窮していることになるなら、私は遺書を変える(つもりだ)。

仮にこの分析が正しいとすると、フランス語の si- 節は独自のモダリティ表現を表さない節ということになり、si- 節中に法助動詞や法副詞が現れる例(37)が非文であることは説明できる。しかしながら、この分析によると、時間節の場合と同様、単純未来形が表す「未来時区域」に貼りついている「予測」のモダリティも、単純現在形が表す「現在時区域」に貼りついている「断定」のモダリティも si- 節では背景化し、解釈に関係しないことになる。したがって、なぜ si- 節において単純未来形が用いられず、単純現在形が用いられるのかという疑問は依然として残ったままである。

ここで重要なのが、同じ拘束節(意味的に不完全な節)に属する時間節と si- 節(フランス語の条件節)では言語環境の特徴が異なるという点である(そもそも、時間節と条件節の名が示すように、両者は異なる種類の言語環境である)。具体的にいえば、両者の主節への従属の仕方に違いがあるのである。具体的に見ていこう。まず、時間節では、時間接続詞の種類(例:quand 'when',

avant ‘before’, après ‘after’) によって主節状況と時間節状況の時間関係が決まるが、主節状況が未来時指示の場合でも、時間節状況が未来時に生じるのか否かは時間節内の時制形式によって決まる。²⁴ すなわち、時制形式選択に関しては、時間節は主節と独立した形で行うことになる。それゆえ、時間節状況が未来時に生じることを表すのに、単純未来形を用いることになる。

一方、si-節は、上で見たように、主節との強い因果関係を表し、かつ、それが両者の唯一的な関係であるため、両者の時間関係は常に si-節状況が主節状況に対して同時もしくは直前という時間関係として解釈される。これは、Declerck (1991, 2006) の用語でいえば、「おおまかな同時性 (Sloppy Simultaneity)」を表すということになる。この両節の密接性により、si-節の時制形式選択は主節 (帰結節) 時点を基点として行われると仮定する。より理論的にいえば、例えば、(33a) の si-節中の venir ‘come’ の 3 人称単数直説法単純現在形 vient の時制構造内にある話者の時制視点が発話時におかれるのではなく、主節 (帰結節) 内の定形動詞 partir ‘leave’ の 3 人称単数直説法単純未来形 partira の出来事時の上におかれることになる。これはデフォルト以外の場合に当たるが、これも ad hoc な説明ではない。絶対時制形式の時制構造内の話者の時制視点が発話時以外の時点におかれる他の例として、ドイツ語の間接話法補部に生じる直説法現在形を挙げることができるからである。

- (40) Er sagte, dass er krank ist.
(彼は、自分は病気だと言った。)

(40) では、ist ‘be’ は元発話時との同時性を表している。²⁵ 以上の観察から、本稿の分析では、主節との「(おおまかな) 同時性」を表せる単純現在形が、si-節という言語環境のもつ特徴のために用いられるということになる。²⁶

6. まとめ

本稿では、英仏語の 2 種類の未来表現、すなわち、未来形と未来時指示用法の単純現在形の時制現象の類似点と相違点を、一般的な時制理論である和田の合成的時制理論に基づいて体系的に説明した。まず、未来形についていうと、英語の will-文は法助動詞 will+ 原形不定詞から成り、2 つの出来事時をもつ (will の出来事時が現在時を、原形不定詞の出来事時が未来時を指す) のに対

し、フランス語の単純未来形は「未来時区域」内に出来事時が生じ、その時間区域には文法化した「予測」のモダリティが貼りつく。²⁷ この時制構造の違いが、両時制形式の時制現象の相違を引き起こすということが明らかになった。

次に単純現在形であるが、英語の単純現在形もフランス語の単純現在形も「断定」のモダリティを伴うので、「世界の構造」を構成するという解釈を受ける場合に未来時言及が可能となる。しかしながら、英語では「断定」のモダリティは時制形式の外側の zero 形式と結びつくのに対し、フランス語では「断定」のモダリティは「現在時区域」そのものに貼りつく。この違いが、両時制形式の時制現象の相違を引き起こすことが明らかとなった。

注

* 本稿の作成にあたり、査読委員の渡邊淳也氏には貴重なコメントをいただいた。また、フランス語のデータの容認性判断に関しては、Baptiste Puyo 氏の協力を仰いだ。記して謝意を表したい。なお、本稿は、2012 年度科学研究費補助金「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」（課題番号 24520530）と「文法と語用論の関係に関する日英語対照研究」（課題番号 24320088）の補助を受けている研究成果の一部である。

- 1 ここではいちいち文献名を挙げないが、興味がある読者は Wada (2001, 2009, 2011) の参照文献一覧をご覧ください。
- 2 例えば、単純未来形が表す用法の記述分析だと青木 (1998)、未来時指示用法の単純現在形の記述分析だと練尾 (2005)、単純未来形と迂言的未来形の比較分析だと Fleischman (1982, 1983)、南館 (1997)、渡邊 (2013) (Fleischman は英語との比較も行っている)、単純未来形・迂言的未来形・未来時指示用法の単純現在形の比較分析だと Vet (1994)、未来表現の総合化・文法化に関しては Fleischman (1982)、渡邊 (2009) などがある。
- 3 本稿では、英語の will-文を、特にフランス語の単純未来形と一緒に言及する際に、便宜上「未来形」という言葉を用いることがあるが、これによって英語の will-文を(単純)未来形と認めているわけではない。本稿では、will はあくまでも法助動詞の現在形であり、未来時に言及するのは原形不定詞部分であると考えている。
- 4 同様の主張は Celle (2004/2005) でもなされているが、一般時制理論に基づいて構築された時間構造による説明は本稿のオリジナルである。
- 5 英語の will-文と同様、フランス語の単純未来形も、特に 2 人称主語の場合に、文脈に応じて「命令」や「約束」などの語用論的な解釈が出てくる場合がある。例えば、(i) における単純未来形は「約束」を表すと解釈できる。

(i) ... Soyez sans crainte. Avant dix minutes, vous sortirez d'ici, saine et sauve. Dix minutes, Clarisse, pas davantage.

(sortir 'go out' の 2 単直単未 (敬称))

(心配することはない。十分もたないうちに、きみをここから、安全無

事に出してやる。十分だ、クラリス、それ以上はかからない。)

(Maurice Leblanc, *La Comtesse de Cagliostro*, p. 258)

このような語用論的解釈を表す未来表現は本稿では扱わない。

- 6 渡邊淳也氏（個人談話）によると、フランス語の単純現在形による未来時指示の例の容認性が若干低いものについては、未来時を指す副詞類の存在によって当該状況が現在から断絶している印象を受けるからかもしれないということである。加えて、単純未来形が積極的に「断絶」を表すので、対比において単純現在形が劣るということも考えられるかもしれないようである。この点は、今後詳しく調べていきたい。
 - 7 (8d) の時間節中の時制は前未来形であるが、ここで重要なのは、英語と違ってフランス語では「未来形」が用いられているという点である。
 - 8 Helland (1995) によると、Reichenbach (1947) の枠組みに基づくフランス語の時制分析も盛んだが、彼自身はその枠組みを批判し (Wada 2001 も参照)、自らの代案を出している。彼の分析も合成的分析であり、「準現時 (Reference Time=R)」という概念的の本質が不透明な時間概念を廃し、新たに「出来事時 (Event Time=E) を測るための出発点」という役割を果たす「計算時 (Point of Calculation=P)」という時間概念を導入している。この概念は、和田の一連の研究でいうところの「基準時 (Time of Orientation=O)」とほぼ等価な概念である。また、Helland も、時制形式そのものの意味構造とそれが時間軸上に結び付いた意味構造 (和田の一連の研究ではそれぞれ「時制構造」・「時間構造」として言及されている) を区別しているという点で、和田の一連の分析と精神を共有している面が多々あると思われる。例えば、直説法単純現在形の場合、時制構造に当たる意味構造は「P, E (P と E が同時)」であり、デフォルトの場合、時間構造に当たる意味構造は、P が S と同定されるために (S は発話時)、「S, E (S と E が同時)」となる。
- Helland の枠組みと本稿の枠組みの相違点や、どちらのほうがより説明力が高いかなどの点は今後詳しく吟味していかなければならないが、現時点で Helland の問題点と思われる点を 2 つほど以下に挙げておく。まず、彼の分析では、歴史的現在の単純現在形は P が過去のある時点と同定され、E はそれとの同時性を表すのに対し、未来時指示用法の単純現在形は P が未来のある時点と同定され、E はそれとの同時性を表すことになる (これらはデフォルトではない場合とされている)。この分析では、歴史的現在に伴う「眼前性」というニュアンスが未来時指示用法にはないという違いを時間構造に反映させられない。次に、本稿の論点でもある、英仏語の直説法単純現在形の未来時指示用法に差異がみられる点について (cf. (5) (6))、現時点ではどう説明されるのかが明らかでない。これらを扱えることができる和田の一連の分析のほうが、この点ではより説明力があると思われるが、詳しい比較検討は今後の課題である。
- 9 非定形マーカー自体がもつ抽象的な意味の中から (文法的) 時間に関する情報が導き出されるという考え方をもう少し詳しく見ておこう。例えば、Hirtle (1967) では、TONGUE と呼ばれる「ことばの潜在的な意味と形のペアで、永久不変な中身」として、現在分詞は「部分的に展開した出来事 (partly developed event)」を表すとし、その出来事は「すでに実現した時間 (time already

actualized) とまだ実現していない時間 (time not yet actualized) から成り立つとしている (p.17)。本枠組みから捉え直すと、現在分詞マーカである -ing はこの特徴をもつため、ここから導き出される文法的時間情報は「同時性」ということになる。

ここで注意されたいのは、各 R- 形態素が表す時間関係はあくまでも文法的（あるいは論理的）時間関係であるという点である。実際の時間軸上に投射される際、デフォルトの場合は、（特定の時間関係を表している場合は）その文法的時間関係がそのまま実際の時間関係として解釈されるが、生起する言語環境の特徴の影響を受けて時間値が「強制 (Coercion)」されることもある。強制とは、認知言語学的分析でしばしば用いられる説明装置のことで、「ある言語表現のデフォルトの意味が当該言語環境と合致しない場合、その特徴に合うように調整して解釈される」ことをいう。例えば、Putting down my newspaper, I walked over to the window (Swan 1995: 406) において、現在分詞 putting のもつ時制構造は「(文法的) 同時性」であるが、この言語環境においては、2つの節が表す状況の自然な関係に対する我々の一般的知識、分詞節状況の瞬間性、線形順序などの要因から、分詞節状況が主節状況の直前に生起すると解釈されるのがふつうである。これが強制の例である。ちなみに、この場合は、実際の時間関係は継起関係ではあるが、捉え方としては（直前性を表すので）広い意味での同時性ということも可能である (Declerck 1991, 2006 のいう「おおまかな同時性 (Sloppy Simultaneity)」に相当する)。

- 10 will が未来時制マーカか法助動詞かの議論は依然決着がつかない白熱したテーマではあるが、will を法助動詞とする本稿の立場の正当化については、和田の一連の研究以外に、Lyons (1977), 中右 (1994), Huddleston (1995), Huddleston & Pullum (2002), Celle (2004/2005), Klinge (2005), Collins (2009) などを参照されたい。

- 11 本稿の「単純未来」は、Close (1977) の「未来の事実に対する言明 (Statement of Future Fact)」, Palmer (1979) の「未来用法 (Future Use)」に対応する。
12 will を法助動詞とする本稿の分析では、(i) が示すように、will-文が「現在時にあてはまる状況の推量」に用いられることも統一的観点から説明できる。

(i) That'll be the electrician — I'm expecting him to call about some rewiring [on hearing the doorbell ring]. (Leech 2004: 86)

この場合も、依然として「高い蓋然性」は守られており、未来時指示の場合とは「予測」の対象が現在時にあてはまる状況であるという違いに過ぎないと分析できるからである。なお、この場合の時間構造は、原形不定詞の出来事時が will の出来事時と同様、発話時と同時にあてはまることになる。

- 13 この「断定」のモダリティは、Verstraete (2001) のいう意味での「主観的モダリティ (Subjective Modality)」, すなわち、「法的遂行性 (Modal Performativity)」を表すモダリティの一種と解釈できる。
14 複合過去形の場合、助動詞に être 'be' を用いたときには、過去分詞は主語の性数に一致する。

(i) Je suis arrivé(e)./Elle est arrivée./Nous sommes arrivé(e)s.

その一方で、人称・法・時制に比べて数は直示的要素かどうかについては議論

の余地がある。したがって、A-形態素か否かを定める要因として数を外せば、(i)のような事例は問題とならない。しかしながら、ポルトガル語の人称不定詞のような現象も存在することから、A-形態素・R-形態素の定義は、当該言語において「動詞に付随する文法的直示概念の種類が最も多い時制形態素がA-形態素、それ以外はR-形態素」というように相対化されるべきなのかもしれない (cf. 和田 2011)。詳しくは今後の課題としたい。

- 15 ただし、渡邊 (2009, 2013) が指摘するように、現代フランス語では、単純未来形による現在時指示は古風もしくは南仏風である。
- 16 渡邊 (2013) は、渡邊 (2008) の分岐的時間による可能世界意味論のモデルに基づき、フランス語の単純未来形は「期待世界 (相対的に蓋然性の高い可能世界) の中に当該状況があてはまる」ことを表し、「当該未来状況のあてはまる時点は発話時と断絶している」ことを示すと述べている。本稿のフランス語の単純未来形の時制構造ならびに時間構造とどのようにかわってくるかは、前提としているモデルが異なるので、直ちに明らかではない。ただ、特にフランス語の迂言的未来形との比較分析において、この単純未来形の基本図式は、渡邊の枠組みの中でうまく機能している。本稿の分析とどうかかわってくるかは、今後の検討課題としたい。
- 17 この未来時指示の無標性により、現代フランス語において単純未来形の現在推量用法が衰退し、「予測未来」に特化した方向へ文化化してきている理由を説明できる (cf. 渡邊 2009)。
- 18 しかしながら、田原 (2012) にも指摘があるように、*maintenant* が発話時とほぼ一致する始点をもち、終点が不確定で未来へ続く時間幅が想起できる場合は、単純未来形との共起が許されるようである。(i) がその一例である。

(i) *Ils viendront chez moi maintenant.*

(彼らは今うちに来るでしょう。)

ただ、渡邊淳也氏 (個人談話) によると、*maintenant* には「今度 (最も近い将来)」に相当する時間的後方指示性の意味もあり、この例が容認されるのはその意味においての可能性もあるようである (この場合、本稿の主張を支持することになる)。この点は今後詳しく調べていきたい。

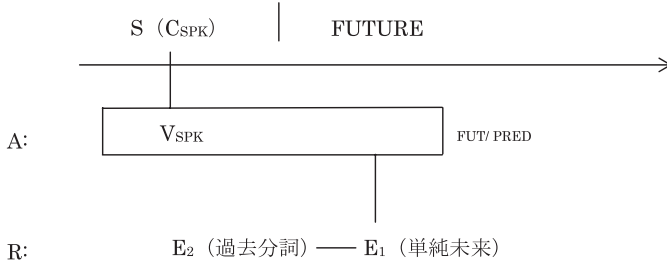
- 19 ただし、Celle (2004/2005: 192; fn.36) によると、データベースからの事例は見つからなかったようである。
- 20 この点について、渡邊 (2013) は、単純未来形の現在推量用法を *devoir* 'must' との比較を通じて、詳しく論じている (渡邊 2004 の第 6 章も参照)。渡邊 (2013) の観察によると、この用法に対する母語話者の判断は、文脈によって左右される側面があるようである。例えば、ある母語話者にとって (i) の容認性は低いが、同じ話者が (ii) は完全に容認するという。

(i) *??Il sera malade.* (彼は病気だろう。)

(ii) *Il aura encore sa migraine.* ([皮肉めいて] 彼はまた偏頭痛というだろうよ。)

いずれにしても、その容認性が文脈によって左右されるということは、単純未来形の現在推量用法が有標の用法であることを示していると思われるので、本稿の主張と合致する。

- 21 前未来形の時間構造は、以下のようになる。例えば、(8d)の *lorsque*-節における前未来形 *aurons aboli* の場合、単純未来形 *aurons* が E_1 を、過去分詞形 *aboli* が E_2 を表し、 E_2 が E_1 より時間的に前に来るという時間構造になる。したがって、こと単純未来形の部分に限っていえば、単純未来形の未来時指示用法の時間構造と同じになる。



- 22 (28d)は渡邊淳也氏ご提供による実例である。
- 23 (4c)において、単純現在形による未来時指示が可能となるために未来時副詞 *après-demain* が必要であるのは、当該状況が生じる未来の時点が明確でなければ、通例、その状況は確定した決定済みの状況とはみなしえないからである。対応する英語版についても同じことがいえる。
- 24 ただし、同時性を表す時間接続詞の場合は、主節状況が未来時指示なら、自らの時制形式に因ることなく、時間接続詞のもつ意味から未来時指示の解釈は可能であるといえるかもしれない。ただ、ここで重要なことは、時間節全体としては、*si*-節とは異なる言語環境的特徴があるという点である。
- 25 ドイツ語では、英語と同様、時間節・条件節ともに、未来時指示の場合は原則として単純現在形を用いるので、見た目からは、*wenn*-節の単純現在形(例：(38a))が主節動詞の出来事時を基点として選択されているとは言い切れない。発話時を基点として選択された場合でも、*wenn*-節では「断定」のモダリティの制約がないため、「未来時領域」(主節が指すのと同じ時間領域)を指すことが可能だからである(注26も参照)。この点は今後の検討課題である。
- 26 ここで、英語の未来時言及の *if*-節で単純現在形が用いられる事実も同じように説明されるのか、という疑問が生じる。しかしながら、本稿の枠組みでは、英語の *if*-節の絶対時制形式は、あくまでも、その時制構造内の話者の時制視点が発話時におかれるデフォルトの場合と考えられている(例えば、和田2011)。この差を引き起こしているのが、英仏語の条件節の言語環境的特徴の相違、すなわち *if* と *si* が表す主節状況との因果関係の密接度の相違なのであるが、ではなぜそのような差が存在するのだろうか。この問いに対する答えは直ちには出てこないが、1つの可能性として、和田の一連の研究(和田2005, 2008, 2010)で導入されている「話者意識への引き寄せ(C-牽引)」という概念の度合いの差に因るのかもしれない。C-牽引とは、「伝達行為の主体である話者の意識が存在する発話時を中心とした時間帯(=現在時)の磁場へ引き寄せられる文法現象」のことである。和田(2008)で述べられているように、英語のほうがフランス語

よりも C- 牽引度は高い。したがって、(予測型条件文における) 条件節という同じ言語環境において、C- 牽引度の低いフランス語のほうが話者の時制視点が発話時に引き寄せられず、その結果、この言語環境の特徴から主節時にアンカーすると説明できると思われる。詳しい考察は今後の課題としたい。

- 27 この主張は、Fleischman (1982: 75) が指摘する、「第1 義的に時間を表す未来指示形式は総合的に、第1 義的にモダリティを表す未来指示形式は分析的になる」という一般化とも合致する。ただし、Fleischman 自身は、フランス語の単純未来形の第1 義的な値は法的 (modal) であると考えているようである (p.101)。

参考文献

- Allen, Robert (1966) *The Verb System of the Present-day American English*. The Hague : Mouton.
- 青木三郎 (1998) 「現代フランス語の単純未来形の「多変性」について」『文藝言語研究—言語篇』34, 115-133.
- Celle, Agnès (2004/2005) “The French Future Tense and English *Will* as Markers of Epistemic Modality,” *Languages in Contrast* 5.2, 181-218.
- Collins, Peter (2009) *Modals and Quasi-modals in English*. Amsterdam/New York : Rodopi.
- Close, Reginald A. (1977) “Some Observations on the Meaning and Function of Verb Phrases Having Future Reference,” *Studies in English Usage : The Resources of a Present-day English Corpus for Linguistic Analysis*, ed. by Wolf-Dietrich Bald & Robert Ilson, 125-156. Frankfurt : Peter Lang.
- Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and Prediction : Time, Knowledge and Causation in Conditional Constructions*. Cambridge/New York : Cambridge University Press.
- Declerck, Renaat (1991) *Tense in English : Its Structure and Use in Discourse*. London : Routledge.
- Declerck, Renaat (in cooperation with Susan Reed & Bert Cappelle) (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase Volume I : The Grammar of the English Tense System*. Berlin/New York : Mouton de Gruyter.
- Duffley, Patrick (1992) *The English Infinitive*. London : Longman.
- Duffley, Patrick (2006) *The English Gerund-Participle : A Comparison with the Infinitive*. Frankfurt : Peter Lang.
- Fleischman, Suzanne (1982) *The Future in Thought and Language : Diachronic Evidence from Romance*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Fleischman, Suzanne (1983) “From Pragmatics to Grammar : Diachronic Reflexions on the Development of Complex Pasts and Futures in Romance,” *Lingua* 60, 183-214.
- Goldsmith, John & Eric Woisetschlaeger (1982) “The Logic of the English Progressive,” *Linguistic Inquiry* 13, 79-89.
- Helland, Hans Peter (1995) “A Compositional Analysis of the French Tense System,” *Tense Systems in European Languages II*, ed. by Rolf Thieroff, 69-94.

- Tübingen: Niemeyer.
- Hirtle, Walter H. (1967) *The Simple and Progressive Forms: An Analytical Approach*. Quebec: Presses de l'Université Laval.
- Hornstein, Norbert (1990) *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Huddleston, Rodney (1995) "The Case against a Future Tense in English," *Studies in Language* 19, 399-446.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Janssen, Theo A.J.M. (1996) "Tense in Reported Speech and Its Frame of Reference," *Reported Speech*, ed. by Theo A.J.M. Janssen & Wim van der Wurff, 237-259. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Jones, Michael Allan (1996) *Foundations of French Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Judge, Anne & F.G. Healey (1983) *A Reference Grammar of Modern French*. Melbourne: Edward Arnold.
- Klinge, Alex (2005) "Where There Is a Will, There Is a Modal," *Modality: Studies in Form and Function*, ed. by Alex Klinge & Genrik Høeg Müller, 169-186. London/Oakville: Equinox.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd Edition. London: Longman.
- 南館英孝 (1997) 「Aller+inf. と単純未来—その棲み分けと競合—」東京外国語大学グループ (セメイオン) (編) 『フランス語を考える—フランス語学の諸問題 II』 22-33. 東京: 三修社.
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』東京: 大修館書店.
- 練尾 毅 (2005) 「未来時を表す現在形」東京外国語大学グループ (セメイオン) (編) 『フランス語を考える—フランス語学の諸問題 III』 167-179. 東京: 三修社.
- Palmer, Frank R. (1979) *Modality and the English Modals*. London/New York: Longman.
- Prince, Glanville (1986⁴) *A Comprehensive French Grammar*. New York: Basil Blackwell.
- Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*. New York: Academic Press.
- Salkie, Raphael (2010) "Will: Tense or Modal or Both?" *English Language and Linguistics* 14.2, 187-215.
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*, New Edition. Oxford: Oxford University Press.
- 田原いずみ (2012) 「副詞 maintenant の本質へのアプローチ」坂原茂 (編) 『フランス語の最前線 1: 名詞句意味論』 219-245. 東京: ひつじ書房.
- Verstraete, Jean-Christophe (2001) "Subjective and Objective Modality: Interpersonal and Ideational Functions in the English Modal Auxiliary System," *Journal of Pragmatics* 33, 1505-1528.

- Vet, Co (1994) "Future Tense and Discourse Representation," *Tense and Aspect in Discourse*, ed. by Co Vet & Carl Vetters, 47-76. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Wada, Naoaki (2001) *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*. Tokyo: Kaitakusha.
- 和田尚明 (2005) 「C- 牽引と公的自己中心性の度合い」『茨城大学人文学部紀要 (コミュニケーション学科論集)』17, 113-138.
- 和田尚明 (2008) 「公的自己中心性の度合いと西欧諸語の法・時制現象の相違」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 (編)『ことばのダイナミズム』277-294. 東京: くろしお出版.
- Wada, Naoaki (2009) "The Present Progressive with Future Time Reference vs. *Be Going To*: Is Doc Brown Going Back to the Future Because He Is Going to Reconstruct It?" *English Linguistics* 26.1, 96-131.
- 和田尚明 (2009) 「『内』の視点・『外』の視点と時制現象—日英語対照研究」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編)『『内』と『外』の言語学』249-295. 東京: 開拓社.
- Wada, Naoaki (2010) "On the Distinction of English Past Tenses," *Distinctions in English Grammar, Offered to Renaat Declerck*, ed. by Bert Cappelle & Naoaki Wada, 42-71. Tokyo: Kaitakusha.
- 和田尚明 (2010) 「現在完了形の表す意味範囲の変遷と C- 牽引: 英蘭語比較研究」『文藝言語研究—言語篇』58, 75-112.
- Wada, Naoaki (2011) "On the Mechanism of Temporal Interpretation of *Will-Sentences*," *Tsukuba English Studies* 29, 37-61.
- 和田尚明 (2011) 「日英語時制現象の対照言語学的分析—条件節を事例研究として—」『文藝言語研究—言語篇』60, 69-120.
- 和田尚明 (2012) 「英語の『未来』の文法」藤田耕司・松本マスマ・児玉一宏・谷口一美 (編)『最新言語理論を英語教育に活用する』300-310. 東京: 開拓社.
- 渡邊淳也 (2004) 『フランス語における証拠性の意味論』東京: 早美出版社.
- 渡邊淳也 (2008) 「分岐的時間の表象をもちいた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究—言語篇』54, 15-44.
- 渡邊淳也 (2009) 「フランス語およびロマンス語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究—言語篇』55, 123-144.
- 渡邊淳也 (2013) 「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究—言語篇』63, 69-106.